

---

**今のところ、未定**

国土無双

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

今のところ、未定

### 【Nコード】

N5444M

### 【作者名】

国士無双

### 【あらすじ】

バカな主人公と、ゆかいな仲間達がありなす話。

車の排気ガスとアスファルトの熱気が立ち込めている。

そんな最高気温35 の真夏日に似つかわしくないファッションに身を包んだ人間が、俺の前を通りすぎて行った。

毛皮のコート。

もう一回言おう。

毛皮のコート。

しかも、知人。

さて、どうしたものかな？

ま、取り敢えず尾行？

尾行することにした。

目的地其の一

スーパーマーケット。

彼女は、その目立つ恰好のまま、近所のスーパーに入って行った。

そしてコートを脱がない。

当然、俺も後に続いて入るわけで。

気分が良いか悪いかと言えば、悪い。

俺はそそくさと店内に入り、雑誌コーナーで暇を潰す。

その間に彼女は棚から落ちたであろうスナック菓子の袋を靴で潰す。

俺が漫画を見てクスツと笑う。

その間に彼女はクスツと笑われる。

俺はちよつとエッチな雑誌を間違えて読んで赤面する。

その間に彼女は自分の置かれた状況を理解し赤面する。

どんだけ不器用なんだよ…  
しかもその恰好で。  
お前を尾行した俺がバカだったよ。

目的地其の二  
海。

結局スーパーでは何も買わなかった彼女だが、ここに来てやっと毛皮のコートの意味が解った。  
『汗をかいて、気持ちよく海に入るっ』ということだろう。  
なんだ、そういうことだったのか。

ー110分後ー

人が沢山居る所から少し離れたところに彼女の姿が。  
毛皮in彼女の状態で。  
汗をダラダラかいている。

……俺、もう帰る。

見切りを付けた俺は、真っ直ぐ家へ向かう。  
今日一日、無駄に過ごしたなー。  
何か、恥ずかしかったし。  
何故彼女はあの様な恰好をしていたのだろう。  
趣味が逸脱しているから？

それなら『明日からの南極旅行の為の訓練をしている』よりは可能

性が無くもない。  
でも…いや、バカかな。

ー3日後ー

「お、淳、おはよ〜」

「…お早う。何？今日は毛皮のコート着てきてないの？」

「……何のことDAI？」

「いや前に着てたから。スーパーでドジった時」

「…見てた？」

「もう、バツチリ」

「いやー！何で淳なのよー！バカにされるー！」

「湊、大丈夫。もう散々したから」

「それはそれで困るんだけど…」

「家族に話したら大爆笑されてさ…今後は飯のオカズにお前の話をしようと思うんだ」

「何その告白！？」

「ダメかな？」

「駄目だよ！私が許さないよ！てか、家族に話しちゃったの！？」

「『まったく…湊ちゃんは昔っからそうなんだから。オホホ』とか言ってたぞ？」

「うううう…もうお嫁に行けない…」

「大丈夫。もしお前がそうになったら、俺が貰ってやるから」

「淳…」

「と、言うのは冗談で、家族にも話さないから」

「う、薄々気づいてただけだね！そんなこと！」

「それも冗談で〜。…次の回覧板が楽しみだなあ…」

「お前何した！？あー！私の世間体がー！」

むっっちゃ動揺しとるやん。

冗談なただけだ。

「じゃあ、理由を話したら訂正をしてやるっ」

「だったらいいもん！自分で修正するから！」

「凄い酷いことをした人の言い訳が通用すると思ってるのかな？君は」

「淳いいいいいい！てめえ何した！」

「店を一軒潰したって言いふらした」

「袋菓子一個しか潰してない！」

「さあ、理由を話せ！」

「……………ダイエット……」

「は？」

「だからダイエット！最近体重増えてきたから……」

「フ…アハハハハハハ！」

「な、何よ！」

「汗をかいてダイエットだあ？んなもん、出来たら苦労しねーよ！有酸素運動とか、その辺の事をしろよな！」

「確かに…最もだ……」

「わかったか？」

「わかった…けど、許さん！」

「ぬおあ！」

「よくもそんな噂を流してくれたなあ？」

「ちよ、嘘嘘嘘嘘嘘嘘だって！」

「はああああ！」

「これ…顔面打撲くらいいってないか？」

「……………そのまま逝っちゃえばよかったのに……」

「うつせえ！お前のせいだぞ！」



プシューウウウウウウウウ……

「ごめんね。私にはこうすることしか出来ないから……」

「お前…覚えて……るよ……」

……

「よくも破ってくれたな？」

「いいえ、滅相そんなつもりは……」

どうやら、あれから3時間もの間、眠っていたらしい。

湊め…呪ってやる……

「じゃあ、右頬出せ。今なら2発を3セットで200円。安いだろ

？」

「先生。殴るかカツアゲするか、どちらかにしてください」

「じゃあいい。頬のみで許してやるつ。ほら、出せ」

「……痛くしないでくださいよ？」

「………知らん。じゃ、いくぞ」

「ひいいいいい！」

パンツ！（パンツじゃないよ）

という音は響かなかった。

俺は恐る恐る顔をあげた。

「ありゃ、おかしいな…なんでこんな所に居るんだ？池田、教室戻れよ」

……

何だ何だ？

「んああ…調子狂うなあ…」

今頃は親に連絡が入って、説教されてる最中…だったはずなんだけ  
どなあ。

…認知症？

…二重人格？

いや、ない。

大体、そんな人間が教師採用試験に受かる訳がない。

さあ、何故だ？

…まあいいや。

難しい事は止めだ。

面倒臭い。

俺は思考を停止させ、ケータイを手に取り、開く。

不在着信、1件。

何だ？

俺は不思議に思い、再生を押した。

『…今夜、もう一度電話をかける。必ず出るように…』

何だよ。

知らない番号。

着信時に音の鳴らなかつた着信。

何とも表現し難い恐怖感が襲ってくる。

―無視だな―

ケータイを閉じ、臉を下ろす。

暗い空間に意識が吸い込まれてゆく。

この時が、一日で一番の至福の時間と言えるかもしれない。

唯一の安息の時間と言つべきか。  
しかし、その時間を壊す出来事が起ころうとしていた。  
眠りにつこうとしていた時に、一通の着信が入った。  
無視しようとしたが、鳴り止まない。  
鬱陶しくなったので、仕方なくケータイを握る。  
開いた途端、音は鳴り止み、俺は、液晶に吸い込まれて行った。

妙な浮遊感。

正直、気持ち悪い。

電脳空間と言つのであろうか。

上下左右がドットで埋め尽くされている。

酔ってきた…

『おやおや、意外に早かったじゃありませんか』

遙か後方から声が聞こえた。

振り返つて見ると、短金髪の青年が立っていた。

「誰だ、お前」

俺が問いかけると、そいつはこちらに近寄ってきた。

「昼間、電話をした者ですよ。不在着信になつてしまいました。

本当はもう少し早くに来てほしかつたんですけどね。まあ、あなたにはあなたの都合がありますから、文句は言えませんが。それより、あなたを読んだ理由をお教えしましょう。多少急ぎ足になりますが…あなたを読んだ理由は他にもありません。あなたにこの世界を助けてほしいのです。あちらの世界、あなたで言う現実世界ではあなたは一般人ですが、ここ電脳世界ではあなたは勇者なのです」

「…さっぱり話が掴めません」

「そう…ですか…。では端的に説明します。池田さん、人差し指を立てて目を瞑ってください。そして、その指先に炎をイメージして

みてください」

「それで何になるんだよ……」

俺は、試しにやってみる。すると……

「……こんなもんか？…うおっ！何だコレ！指から炎が！燃えとるつちゅーに！」

「ご安心下さい。それはあなたが作り出した炎です。よってあなたに危害が加わることはありません。解りましたか？あなたには”力”があるんです。この世界に来た時にだけ発動する、ね。どうですか？助けてくれませんか？」

どうする。

面倒くさいことは苦手だが、このまま逃げるのは後ろめたい。

俺本人が負けず嫌いなのが災いしたな。

「…分かった。できる限りの事はやる。無理な事だつてあるぜ？」

「ええ。ありがとございます。ではまず、”力”を操ることを覚えましょう。時間が無いので、急いで行きますよ」

「ああ。じゃあ俺は何をすればいいんだ？」

「うーん、そうでうね…。じゃあまずは作った火球を飛ばしてみてください。要領は簡単ですよ。イメージを思い浮かべればいいです」

「…そりゃー！」

俺が念じた瞬間、指先の火球が飛んで行った。

変な所に。

「…」

ビュンッ！

「大分マシになりましたね」

ビュンッ！

「その調子です」

ビュンッ！ビュンッ！ビュンッ！

「はあ…はあ…」

「もう完璧そうですね。じゃあ次は…火柱を操ってみましょうか」

体力が…もたんぞ……

「はあ…すまんが、休憩させてくれ…はあ…」

「…そう…ですね。では15分程」

「ああ、助かる」

はあ…はあ…

久しぶりに疲れた…

定期的に走ったりはしてるんだがな…はあ…

「なあ…これって体力以外に減るもんとかってあるのか？」

「精神力と機動力を」

「機動力？なんじゃそりゃ」

「瞬発力みたいなものです。敏捷性に関わってくるのですが、減ると、動き始めが遅くなるんです。そのせいで殺られてしまったり、犯られてしまうので鍛えないといけないんですよ」

「…そうか」

「まああなたは男ですから犯られることは無いでしょうけど。同性愛者以外なら」

「黙れ。人は真面目な話をしているんだぞ」

「それは失礼しました。では、次のステップへ行きましょうか」

「まだ15分経ってないぞ？」

「思い立ったが吉日、ですよ。それっ！」

ゴウン。

視界が揺らいだ。

意識が飛びかける。

俺はその意識を抑制し、踏みとどまらせた。そして、顔を上げた。

するとそこには広大な自然と湖があった。

「何をした？フィールドと俺に」

「細かいことはいいです。では、さっきの要領で水と風を操ってみてください」

「はあ？無理があんだろ」

「いいえ。可能ですよ。今度は水では柱を、風では竜巻を作ってください」

「……やるだけやってみるよ」

……

精神集中……

湖に渦を作る……

はあああああああ……

「舞い上がれ！」

俺は叫んだ。

ダメ元だった。

目を開いたら、想像していた風景が、なかった。

「ちゃんと出来てるー

「やった！出来てる！」

「おやおや。これはお見逸れしました。何回か失敗すると思っていましたが、予想以上です。では、次は竜巻を」

「おう」

イメージは、四方八方から吹く風をぶつけて、大きな上昇気流を発生させる！

5秒後、イメージをそのまま決行させたら、案の定上手くいった。

「素晴らしいです。どうやら想像力と学力はあるようですね」

「いままでは何だと思ってたんだ？」

「単なる”力”を持った”バカ”だと」

「そうか…殴つてもいいか？」

「では、次はモンスターを倒してもらいましょう」

「話を逸らすな…ってモンスターだと!？」

「ええ、コイツです」

ぽんつ、と放り投げられたモンスターは、一昔前にドラゴンクエストで見た、あの青い奴だった。

そう、スライムだった。

「何？これを倒せばいいの？」

「いかにも」

「魔法で？」

「その通り」

「……」

俺は指先に火球をイメージさせ、発射した。

…というのはあからさま過ぎるし、面白くもないので、別の技で倒すことにした。

……ビーム。

あのフリーザ様のようなビームを打ってみようか。  
試しだからな。

俺はビームをイメージして、発射した。

「デスビィイィイイツム！」

叫んでみたくなった。

当たったか確認してみると、ちゃんと貫通して、モンスターは粒子になって消えた。

でも臭い。

「ぬぁ！臭い！ゴムの溶けた匂い！」

「ですから、相性も考えないといけませんよ。でもビームですか。結構使えそうですね。というより、本当に何でも出来るんですね」

「俺もビツクリしたよ。万能だな」

「では、試してみましょう。この傷ついた子犬の治癒を試してみてく

「ださい」

「回復ってことだな。たしかに、自己治癒が出来れば便利だもんな」

「ええ、そうです」

「よし」

俺は手の平を犬から3センチ程離して掲げ、青く広がっていく光をイメージ。

すると、手から少しずつ微々たる光が。

「やったぜ！これで回復も完璧だな」

「いや、待ってください」

「ん？」

下を見ると、光が増幅していた。

そして、その光が、発射された。

俗に言う「かめはめ波」のような光。

そして犬は、消えた。

「なあ…これって、殺っちゃったの？」

「回復は無理、どうしても攻撃技になってしまっ…」と

「メモってんじゃねえ！俺は健気な一つの命を奪っちゃったんだぞ

！どうすればいいんだ!？」

「……… 供養してあげて下さい」

「…そうするよ」

始めての犠牲だな…

「じゃあ、俺は一旦現実世界に戻るよ。また夜に電話をかけてくれ」

「はい。わかりました」

「…そうだ。お前の名前、まだ聞いてなかったな」

「クランです」

「そうか…ま、これからもよろしくな」

「ええ。よろしくお願ひします」

一体どれくらいこっちの世界に居たのだろうか。

早く帰らないと始業のチャイムがなってしまう可能性もある。

えっと…出口出口…

「……………なあ、どうやって帰るんだ？」

「……………知りませんよそんなこと」

「知りませんよじゃねえよ！どうやって帰るかぐらい知っとけよ！  
知らずに俺を呼んだのかよ！」

「冗談ですよ。あそこに非常口があります。そこから出てください」

「…非常口？バカにしてんのか？」

世界の狭間を非常口で行き来しようだなんて…  
あった。

「……………ごめんなさい…クランさん…」

今回は俺に否があったようだ。

「戻れた…」

現在深夜1:00。

どうやらあっちの世界とこっちの世界では、時間の経過速度が違うらしい。

「さあて、寝るか…」

深夜に叩き起こされて、運動させられて、大変だったな…

ふああ…

おやすみ。

「起きて、朝だぞぞ！」

「ぐっふう！」

だ、誰かのリアアットが…俺の首に…

「まだ起きないかな…そうだ！お兄ちゃんの持つてるエッチな本  
を全部燃やしちゃおう！」

「どあああ！起きます！今起きます！…なんだ。香織か」

「今日も慌しい朝だね。そんなにエツチな本が大事なの？目の前にこんなに可愛い女の子がいるのに」

「黙れませガキ。お前のどこが可愛いんだ？」

「へえ…照れ隠しだね？心の底では『こいつ…可愛えな…食べちまいたいぜえ！』とか欲情してるくせにイ」

「勝手に言ってる…朝飯は？」

「もう用意してあるよ…あ！容易に用意！なんちって」

「…食ってくるわ」

「あ、無視しないでよ〜！」

朝から体力を使ってしまった。

はなから削られてたのに。

階段を下り、ダイニングへ行き、席につく

「頂きます」

「召し上がれ〜」

俺達、俺と香織は理由あって二人で暮らしている。

高校生二人を残して出て行きたあ、どんな神経してたか。

「どう？美味しい？」

「ん〜、いつものよりはちよつと美味しいかな？」

「ううう…今日だけインスタントにしたらこの仕打ち…手を抜いた

汁に手作りが負けるとは…トホホ…」

「へえ、インスタントか。どうりで美味いわけだ」

「うわっ！酷いよお兄ちゃん！ツンデレもやり過ぎは嫌われるんだ

よ!？」

「ご馳走様でした」

「お粗末様あああああ！うわああん！」

「ほら、早く着替えるよ。遅刻するぞ」

「あ、うん」

立ち直りが早いのがウチの妹のいいところだ。

「あ、そうだ。折角だから、お兄ちゃんの目の前で着替えてあげよ  
うか」

……何を言い出すんだコイツは。上等じゃねえか。  
「よし。やってみるよ」  
「ひよえっ!?!?…や、やってやるっじゃないの!」  
「おうおう、じゃ、やってみる」  
「せ、制服取って来るから!」  
「はいはい」

1分後

「ほらほら、早く着替えるよ」  
…完全に悪役じゃねえか、俺。  
「むう…お兄ちゃんのエッチ…」  
「どうした?ほら、早く脱げよ」  
「ううう…」  
ガチャリ。  
「おーい、淳!。迎えにきたわよ…って何しとんじゃあ!」  
「うわっ!何だ!…湊!?!」  
「あ、湊お姉ちゃん!助けて!お兄ちゃんがエロオヤジ化しててえ…」  
「幼馴染というポジションが役に立ったわ…」  
「これにはとってーも、マリアナ海溝よりも深い事情があつてですね…」  
「お兄ちゃんが私の身ぐるみを剥がして、イケナイことをしようとしてきて…」  
「へえ…そうなんだ。淳、顔かきなさい」  
「い、嫌だね!」  
「いいから顔かせやあああ!」

パアアアアン!(残響)

「さ、香織。こんな変態置いといて行くわよ」

「あ、うん。……お兄ちゃん、残念だったね」

「……ガクツ……」

じよ、冗談じゃねえぞ……

これからはもつと体力を使うのに、妹と幼馴染にやられてどうすんだ……

立て！立ち上がれ俺！

……やべっ！時間がない！

急いで起き上がり、玄関を飛び出した。

途中、女子二人組からの突き刺さるような視線を感じたが、上手く逸らした。

無事学校には間に合い、午前中は平穩に過ごせた。

しかし……

「じゃあ朝のアレについて説明してもらいましょうか」

昼休み。

何故か香織も加わっての会話だった。

「まあ、いいじゃねえか。詳しくはWebで！」

「あなたねえ……殺されたいの？」

「じゃ、香織に聞いてくれや。俺からは話したくないからな」

口が滑つても言うものか。

大体、香織が挑発しなければこんなことにはならなかったのに……

ピリリリ……ピリリリ……

お、ナイス着信！

「じゃ、俺は電話してくるから」

「あ、ちよつと待って！まだ話は終わってないのよ！」

湊が俺の腕をグイッと引つ張った。ケータイを持っている方の手を。俺は不意を突かれ、ケータイを落としてしまった。

その反動でケータイが開き、俺を含む三人を吸い込んでいった。

…今日はこんなもっかなのか…

「ずいぶん…賑やかですね」

「これでも落ち着いた方なんだぜ？ある程度は説明したから」

「そうですね」

「で、今日は何をやるんだ？」

「そうですね…では、諸説名から。あなたはまだ知らないと思いますが、大気中には”マナ”が存在します。そのマナを駆使すれば、より強力な技が使えます。技の合体等もできるようになります。マナを使えば魔方阵だって描けます」

「マナか…」

「今日はマナの集め方をマスターしてもらいましょう」

「どうやるんだ？」

「まず、精神統一です。できたら大気の流れに沿って力を放出してください。あ、微量で構いません。その後に、放出した力をまた元に戻して下さい。そうすればマナが集まります。より多くのマナが欲しいときは、それを繰り返し替えてください。慣れてくれば一度に集められるマナの量が格段に増えます」

「よし。やってみるか」

……精神統一……

『ねえ、凄いよこの力！ここに死んでた犬が生き返っちゃった！』

『凄いな、湊お姉ちゃん。私は…おお！見えない壁が作れた！』

『それ結界じゃん！香織も凄いよ！』

……精神統一……

「できねーよ！何なんだよお前ら！」

「だって私が手を触れたら、死んだ犬が生き返っちゃったんだよ！？香織だって結界が張れるんだから！」

「…本当か？香織」

「うん」

「すげーなお前ら！まあ俺だっていろいろ出きるんだけどな」

「えー、何ができるの？」

「聞いて驚くなよ？俺はな……」

「蘇生白魔法使いに結界師、そして強力な黒魔法使い……最強なトリオが完成してしまいましたね……」

この世界が救われるのも、そう遠くない気がしてきましたよ……



「役者が揃っちゃったみたいだけど？」

「ええ。意図せず粒ぞろいですね」

「これ、どうするよ」

「さあ。僕に訊かれても」

「お前が呼んだんだろ？責任くらい持つてくれよ」

「…分かりました。では、あなたたち3人でチームを組んでもらいましょう。その後で、ギルドでクエストを受けて下さい」

「意味あんのか？」

「実力を試したいんですよ」

「よし。受けてやるうじゃねえか。で、ギルドはどこだ？」

「あちらです。では、僭越ながら…」

「防具と武器？」

「危ないですから」

「そんなに危険なクエストをしると？」

「本当に危なくなったら自動的にログアウトするので、死の危険性は0%に近いですから、大丈夫です」

「仮死状態はありえるか？」

「植物状態くらいなら」

「0%ではないと？」

「1.5%くらいですかね」

「じゃあ嫌だ」

「それは出来ません。もう登録は済ましてありますから。では、健闘をお祈りしています」

「貴様…覚えてるよ…」

「それでは」

「ここは？」

シチュエーション的には最初の特訓の時と同じ状況だ。ただ、どんなモンスターが出てくるかだ。

即行ラオ ヤンロンみたいなボスキャラが登場したのなら、たまつたもんじゃない。

用心は必要か。

「じゃあお前等、これ着とけ。防具だそうだ」

「ふーん。分かったわ。これって、服の上からでいいの？」

「多分な」

「よいしょつと…」

「じゃ、行きますか」

「ちよつと待つてよ。その剣は？」

「え？これ？俺の」

「なんで？」

「恰好いいから」

「は？」

「このなかで一番腕力があるのは男であるこの俺…じゃないな」

「あんたの理論から行くと、剣を持つべきなのは私なんだけど」

「う、うるさい！これは俺が持つんだ！悔しかったら取ってみやがれ！」

「言つわね…」

俺が『バーカ、バーカ』と言おうとした途端、俺の両手両足が固定された。

「湊お姉ちゃん！結界でお兄ちゃんの身動き封じたから！今のうちに殺つちゃって！」

「ありがとう香織！オラア！死ね淳！」

「ちよ、ま、くぁwせdrftgyふじこーぷー！」

「あんたが私に刃向かおうなんて、100年早いだよ」

「やった！ナイス、湊お姉ちゃん！」  
「こんな変態は置いといて、行こう、香織」  
「はい」

しくなっております。

れません。

深夜テンションでおか

文章を末梢するかもし

何かごめんなさい。

国士無双

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5444m/>

---

今のところ、未定

2010年10月9日15時04分発行